

大平 哲学

一 付 人柄

人を裏切らない政治家として信頼を寄せる人が多い。「人間だから完全ということはありません」

(11・1・日経・夕)

「一利を興すより、一害を除くにしかず」が座右の銘。気負わずに、淡々と、結果よりもプロセスを重視し、現実的に問題を処理しようと、手堅い「六十点主義」の哲学を説く。(10・28・朝日)

この人ほど庶民的で家庭的な人はいない。大蔵省時代、戦時下……「国民酒場」を作った……「日本人はもつと家庭を大切にしなくちゃ……」とよく言う。……「百点満点主義の人に民主主義は分からない」と語っていたことがある(田中六助代議士)

(11・8・読売)

「政治家の生きがいは、自分が国家民族と一体になっっている、なろうとしている、と感ずる時。日中国交回復は、当時は大変だったが、今振り返ってみて、政治家であつてよかつたなと思います。」(11・

10・朝日・夕)

一 人生観

「人間なんて弱いものだよ。カんでみてもしようがない。たんたんと平常心でやればいい」 自然体が信条で、派手なことは好まない。(11・10・日経・夕など)

「エターナル・ナウ(永遠のいま)」(同右)

「スモール・イズ・ビューティフル」(同右)

「政治家である前に人間でなければいかんと思つて愚直に生きてきた。今後もしようしたい。」(10・28・朝日)

「人間は強くないし、愚かでもある。そういう諦(てい)感がありますな、私には。しかし、そこにとどまっていはいかんわけで、いずれは枯れる朝顔でも毎日水をやるでしょ。そういう気持ちを大事にしたい。」(11・10・朝日・夕)

学生時代、無教会主義キリスト教の伝道に青春を捧(ささ)げたいと思つた程のクリスチャンとしての情熱をいま、政治に投じる。政界屈指の読書家で、暇さえあれば本屋をのぞく。……純牛のように歩みはのろくとも着実に、静かな闘志を燃やす。

(11・10・日経・夕)

二 『政治姿勢』 「政治の手法」

『しなやかだが強じんな政治の確立を目指す』
『柔軟に』、『機敏かつ効率的に対応』 『激変する時代に、政治は機敏かつ効率的に対応しなければならぬ。』

「和の政治」(10・29・各紙)

「権力に訴えるのは最後の手段であり、政治家が自ら謙虚に反省しながら汗をかき、誠意をもって理解を求める 和 の政治を信条としたい」……「力の誇示や、不毛の対立・抗争を退ける」 柔軟で強靱な政治 を政治姿勢とする。(10・29・日経)

「話し合いによる、円熟した、実行力ある政治」

(10・21・朝日・夕など)

「国民のニーズ(要求)にこたえる政治」(10・28・東京)

「現実を踏まえて柔軟に対応しなければ国民のニーズ(要求)にこたえる政治はできない。」(10・26・日経・夕)

〔国民と一体の政治〕

「国民と政治との間に距離があつてはいけない。……安易に権力にたよるようなことはしないで、事実を説いて困難を訴えて、国民と一緒になつて、政治をやつてゆく……。自由民主党も、政治も……。これまでなしとげた実績を誇ることが悪いというわけではございません。けれども、もっといいやり方があつた(の)じゃないか、……時機を失することが……なかつたか、その間に国民にどういう苦勞をかけたか、そういう……反省がなければ、……実のある政治にならない。……地道に国民と一緒に考えながら、不毛な対立を避けながら、硬直した発想を慎しみながら、実効のあがる政治をやつていきたい。野党を含めて国民とできれば一体になつて、難局に処するといふ姿勢でまいりたい。」(11・4・共同会見)

『今日の社会の基本的な秩序』について国民的合意が成立しているということは、かつての保守対立の時代が終ったことを意味している。西欧諸国にも新保守主義の台頭がみられる。過去の実績を誇ることで安んじているときではない。自由民主党は、今や新しい時代への対応と選択を迫られている。

国民の多くの方々が自由民主党を支持して下さっていることは、たいへん有難いことである。さらに今後とも、ひとりでも多くの同志を得ることに全力を尽してまいりたい。しかし、不幸にしてなお十分なご理解が得られず、支持していただけない方々も国民の皆さんであることに変わりはない。ご支持いただけないからといって、安易に数の力で押えこもうというようなことは、とるべき道ではない。常に自らを謙虚に反省し、額に汗しながら説得につとめ、合意を求めてまいりたい。それが「国民と一体の政治」であると信じている。

二 1 『イデオロギーの不毛な対立』を排す

『イデオロギーの不毛な対立や硬直した利害の対

決は、政治に渋滞や混乱をきたすばかりである。』

「硬直した対立、抗争は過去のものであり、左右両翼の全体主義を厳しく排除していく。」(10・26・朝日など)

「各政治勢力の不毛な対立、硬直したイデオロギー対立をいまや国民は見放しており……」(10・21日・経・夕)

これまでのところ、政治は、わが国社会の基本的なあり方についての国民的合意が、大多数の良識ある国民の間ですでに形成されているという重要な歴史的事実を見過すか、あるいは過少評価してきたのではなからうか。そのために、政治家や政党は、与野党を問わず、ともすると依然として古い保守対立の観念的、イデオロギー的図式を通して、この新しい複雑な現実を見ようとしてきたのではなからうか。

しかし、こうした硬直した保守対立の図式を前提とした政党間の対立や抗争は、絶妙な平衡感覚を身につけ、円熟した意識を持ち始めた大多数の国民の眼からは、逆に未熟で、時代遅れのもの、不毛で非

生産的なものと映らざるを得ないであらう。

このような円熟しつつある国民の意識と依然として未熟な政治家や政党側の意識とのギャップが、長期にわたって国民の政治不信を招き、いわゆる支持政党なし層の肥大化をもたらしている大きな原因になっているのではなからうか。

二二 『権力志向』と『硬直した姿勢』を排す

『権力志向に根ざす……硬直した姿勢を戒めねばならない。政治はつねに謙虚であると同時に自己改革を怠らず、時代の要請に有効に応え得る構えが必要である。』

「あまり硬直した対決、対立は賢明でないし、必ずしも強くない。達人の剣は「生卵を握るがごとく」という。そうでなければ変に応じられない。柔軟であるが、強じんな手法でゆきたい。」(10・28・朝日)

二一 三 『辛抱強い説得と理解……によって……合意を形成』

『辛抱強い説得と理解、信頼と協力によってより広い合意を形成することを基本姿勢』とする。

「複雑に利害が錯そうする問題を一本にまとめることは容易ではない。しかし、政治家は謙虚に自ら反省しながら脂汗をかいて説得し、合意を求めるときで、権力に容易に頼るのは横着な政治だ。」(10・

31・日経)

三 国民への訴え 政治の中心

三 1 国民の「未来への力」を引き出す

「生きがい」、「生きる喜び」

『黎明にむかって』

『長く苦しかった試練を経て、ようやく黎明が訪れてきました。あたりはまだ闇でも、頭をあげて前を見れば未来からの光がさしこんでいます。後を向いて立ちすくむより、進んでその光を迎え入れようではありませんか。』

「国民にやる気を起こさせるのが政治だと思ふ……」。

こうもしてあげる、ああもしてあげるといふのは政治ではないと思う。政治はそんな力もないし、(そんなことをいっていると) だんだん失望が増すにすぎない。…… 政府がやっていることもわかるじゃないか、という…… 理解というか、(共感をもちたれるというか、) そういうもの(が) 国民の心の中に残るようなことが大事ではないか。だから私は政治家自身の方とが…… 政党自身とか、政府の方の方が、まず第一に大事なのではないかと思う。政府も、こう

している、党も…… 政治家も、汗をかいているじゃないか、だからオレたちも、頑張ろうというよつなことが政治じゃないか。非常に気のきいた奇手妙案なんてものはない。」(10・22・サンケイ)

「政治は与えるものであり、国民が政治に大きな期待を寄せるのは当然だという考えは行き過ぎだ。政治の持つ力に見合ったところで、国民にも我慢してもらわなければならない」(10・29・読売)

政治とは、国民に与えるものではなく、国民から未来への大きな可能性を引き出すものである。

三 2 「甘美な夢」や「幻想をまき散らす」ささいい 「厳しい現実」を直視して、「時には不人気政策も」

「政治には限界があるから、…… 国民にあまり甘美な夢をまき散らすようなことは慎まなければならぬ。」(11・4・共同会見)

「政治は幻想をまき散らすものではない。厳しい現実をもつて国民にこたえるようにしたい。誠実な政治でいかなばならない。」(11・1・日経・夕)

「政策…… は…… 作文ではダメだ…… 実行されなければいかん…… 作文は一晩で書ける…… 日本を天国にするような作文はすぐできる。そんなものは政策ではなくて、紙きれです。それが政策になるのには、そういう政治情勢がないといかんし、それを成り立たす温度なり湿度なり…… 栄養なりがないといかん…… 政策として実行に移す、そういう状況を…… どうしてつくるのが政治…… 時には不人気な政策をとらざるをえないこともある 「きびしいけれども政治家のやらなければならぬ責任がある。……」

(10・22・サンケイ)

「あるがままの現実を、一步一步進めるのが政治。甘美な夢をふりまくことは慎まねば」(11・10・日経・夕)

三 3 「政府の過剰介入」も「国民の過剰期待」もやめなければいけない 「甘えの構造」はもう許されない

「政府が何もかも国民生活に介入するという、政治の過剰介入はしてはならない。逆に国民の方も「すべてが政治の責任だ」という過剰期待(その裏腹の過剰批判)を持つことも、できるだけやめなければならぬ。」(10・28・東京)

「政府にも国民に対する甘えがあり、国民にも政府に対する甘えがある。それが政治への過剰な期待になったり、政治の力量以上の介入になったりして、それが(原因で)行政機構が重いものになり、財政のピンチになってきたのではないか。こういう甘えに対して、国民の側も政府の側も自省していかないと」いけない。(10・22・読売)

「甘えの構造が許されたのは高度経済成長時代のたまゆらの出来事であって、本来、経済にしても財

政にしても厳しいものなんです。それがあつた時期、減税をしながらサービスを拡大するといった離れわざができたのはそういう条件があつたからなんで、いまは内外ともそういう条件が崩れてきている。その辺を国民は、よく知っているとと思う。」(11・2・日経)

「いままではまだどこかに国民に対して、世界に対しても、財政に対しても、甘えがあるんではないか。しかし、だんだんそういうことが許されなくなつてきていることをひしひしと感じますね。」「甘えの気分を内外にもたせないで、政治が相当ハラをくくつてドロをかぶつてやらなければいかん時代がきたということは覚悟しなければならぬでしょ。」(10・22・サンケイ)

戦後わが国において、議会制民主主義は順調に発達してきた。その過程で、個人の権利や言論の自由を尊重するという望ましい慣行が定着してきた。しかし、一方において、自由の行き過ぎとか、無責任とか、自己中心的とかいうことが批判を受けてきている。

これは、民主主義に伴う公共のことや義務の面についての理解が十分でないためとか、自己反省が乏しいためともいわれているが、政治の側のおもねりや迎合の姿勢が、このような傾向を助長した面のあったことも否(いな)めないところであろう。

このような甘えや迎合の姿勢が、政府や財政に対する過剰な期待や政府の側の過剰な介入となつて現われてきている。

しかし、今や現実には極めて厳しい局面を迎えている。このような「甘えの構造」が許される状況ではなくなつてきている。

あるがままの厳しい現実を国民に訴え、「自己責任」の原点に立ち戻つて、国民とともに対応してまいりたい。

「石油ショックのあと……、頼るのは自分だという気持ちが出てきたと思う。それが企業では減量経営、個人については手堅い消費という形で表れてきた。」(11・8・東京)

国民は、すでにこのような対応をはじめていると思ふ。